



双塔

カトリック新潟教会

2016年4月
No. 335

過越の祝い、受難にあずかること

主任司祭 ラウル・バラデス

ご復活、おめでとうございます。

今年も主の復活の祝いに参加する恵みが与えられたことを神に感謝しています。この神秘の重要性を訴える使徒パウロの叫びは今も響きます。

「キリストが復活しなかったとしたら、わたしたちの宣教も無意味なものであり、あなた方の信仰も無意味なものとなるでしょう」。

生きておられるキリストに対する信仰によって、わたしたちは神との正しい関係に導かれ、救われるのです。この偉大な神秘を記念し、再現するのが復活の典礼なのです。それで、キリスト教の初期のころからこの典礼に参加することは非常に大切にされています。教会のおきてに、復活祭のミサに参加することが含まれるほど大事なことなのです。

こういう事柄に関して、聖レオ一世（390年生まれ、教皇在位：440年-461年）は受難の日の説教にこのように語ります。

「過越の祝いを軽んじることはこの上なく重大なことであるが、それにも増して、主の受難にあずからず
に典礼の集会に参加することはさらに重大かつ由々しきことである」。

聖レオは典礼のうちで「主の受難にあずかる」ことを強調しています。わたしたちは典礼に参加するとき、どのようにして主の受難にあずかるのでしょうか。

それは、一人ひとりの人生にある小さな「受難」をイエスの受難に合わせて典礼に参加するのです。こうして、少しずつ典礼のうちで「復活」の小さな体験を重ねていくのです。

毎回、典礼の中で、聖書のことば、典礼のしるしによって、暗闇から光へ、偶像礼拝から真の信仰へ、罪から恵みへ、死から命へ、悲しみから喜びへと、移されていきます。このようにして毎回、典礼にあずかることが、過越の祝いになるにちがいありません。

ところで、人生にはそのような小さな「受難」ではなく、大きな「受難」のときも訪れます。例えば高齢と病気です。その場合、典礼にあずかることができなくなります。そういうとき、教会まで足を運ばない方々は自らの苦しみ、痛みを祈りとして神に捧げることによって、既に主の受難にあずかっており、復活の典礼に参加できなくてもキリストとともに復活の命をいただくことになるのです。

その方々にとって病室は聖堂のようなもので、治療は典礼の代わりになるといえるかもしれません。結局、その場は神との出会いの場となるからです。その方々は、ご復活の祝いに参加できたわたしたちと同じ恵みを、別な形で受けており、しかも、祈りを通してわたしたちを支えてくださっています。

その中で教会とのつながりの大切さが明らかになると考えています。

今年、この教会の多くの方々は高齢、病気などの理由でご復活の祝いに参加できませんでした。いつくしみの特別聖年に当たってこういった方々とともに、信仰の歩み続けるように強く呼びかけられています。具体的に、できるかぎり訪問し、励ましのことばをかけて、一緒に祈ることに取り組んだらどうでしょうか。わたしたちの信仰生活は教会にいる間だけのことではありません。生活の中に信仰が染みこんで、人生全体の支えとなりうるのです。元気に教会で活躍できるときも、そうではないときも、最終的に、わたしたちがどれほどキリストと結ばれているかの問題になるでしょう。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じたのです。」



そよかぜ便り



■ 主のための24時間・共同回心式 ----- 3月4日(金) 17:00 ~ 18:00 -----

教皇様が望んでおられる『主のための24時間』の中で、菊地司教様は「共同回心式」を呼び掛けられた。新潟教会で行われるのは、大瀧神父様が主任、ラウル神父様が助任のとき以来のことである。この日は、司教様が元高松教区長・溝部脩名誉司教様の葬儀ミサでご不在のため、大瀧神父様の司式で行われた。福音朗読の後、神父様は「いつくしみを生きること」についてお話をされた後、会衆に「良心の糾明」を促され、会衆がそれに応え、一般告白を行った。その後、5人の司祭の奉仕により個別告白と個別赦免が行われた後、償いの祈りとして全員が「マリアの賛歌」、続いて「いつくしみの特別聖年のための祈り」を唱えた。

■ 受難の主日（枝の主日）

----- 3月20日(日) -----

四旬節最後の日曜日。センター1階で、主の「エルサレム入城」を記念し、菊地司教様から祝福された枝を持つ全員が列を成して聖堂に入った。赤色のカズラを纏った司教様が祭壇に献香し、ミサを捧げた。「主の受難」を3名で朗読後、司教様は「絶対的貧困」と「相対的貧困」の意味から始められ、「相対的な価値判断が主流の社会の中で、私たちには神の“絶対的な価値判断”の基準がある」と話された。第一朗読の「弟子としての舌」（イザヤ50・4）とは、神が教え導く舌のことであり、神が与えた言葉そのものである。「私たちは、勇気をもって絶対的な価値観を語り続けなければならない」と結ばれた。

みんなの広場



桜の花が咲きますように！！

ルルドの桜の木が、前庭に移植されたことに気付いていますか？
移植した年は花が咲かないと言われていました。でも、よく見ると、小さな蕾がついています。

桜の花に気づいた方は、みんなに教えてあげて下さいね～♪



移植作業（2015年11月23日）



雪の中で（2月6日）



あっ！つぼみ（3月12日）

